

SDGs 達成に向けた「日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」教材



知多半島・豊浜鯛まつりから 考える森里川海

第1章 | 鯛まつりと知多半島・愛知用水

豊浜鯛祭りとは？

鯛まつりとは、愛知県知多郡南知多町豊浜地区で浜と海の安全を祈るために毎年7月に行われる祭りです。豊浜の5地区（中洲・東部・鳥居・半月・中村）から、張りぼての鯛が出て、町内や海を練りまわります。鯛の神輿の原型は、地区の山車を新しくした際に作られたハツカネズミの張り子です。その後、「おもいつき」と呼ばれる張り子は、近海で穫れる魚が造られるようになり、大正初期から海中にも入り、昭和11年頃には鯛の張りぼてが定着しました。

知多半島の隣にある篠島には「御幣鯛（おんべだい）」といわれる千年以上続いている伊勢神宮へ鯛を奉納する神事があります。また、日間賀島には「御用鯛（ごようだい）」として徳川や尾張藩主等へ献上されていました。このように三河湾と伊勢湾に面した海は、昔から鯛などの様々な魚の穫れる漁場として有名でした。

張りぼては、地域によっては赤い真鯛を祭りの後半では黒く塗ってクロダイに変化させることもあります。高級な真鯛と比べると安価なクロダイは庶民の魚として親しまれています。

出典：東海地域における魚介食文化の歴史的展開の一考察_遠山佳治
：鯛(たい) (ものと人間の文化史)_鈴木克美



中洲地区の鯛神輿 (撮影：中島稜太)



マダイとクロダイの鯛神輿

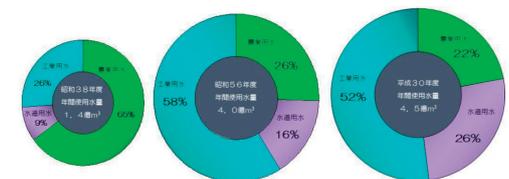
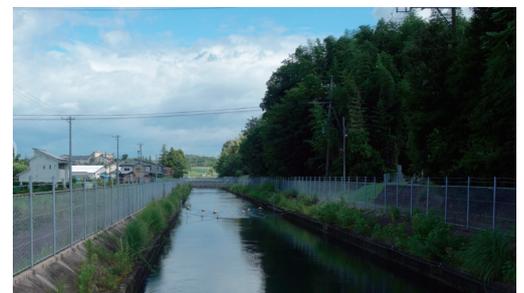
(画像：https://www.aichi-now.jp/spots/detail/304/)

愛知用水と知多半島の農業・工業

1947年、知多半島の農家久野庄太郎が47歳の時に、大河川のない知多半島で数年おきに干ばつが起こることを憂い、恒常的に農業ができるように木曾川から用水路を引くことを決意しました。1955年に成立した愛知用水公団は、愛知県・岐阜・長野県と関連する地方自治体と協働して、わずか5年の工期で、牧尾ダム、約112kmの幹線水路、約1,200kmの支線水路を建設しました。

愛知用水の通水当初(1963年度)は年間約1.4億m³の水を使用し、その半分以上は農業に使用され、知多半島の農業が発展しました。

しかし、昨今(2018年度)では、1963年度の約3倍となる年間約4.5億m³の水が使用され、農業用水の2倍以上の量が工業用水として使用され、工業の発展にも寄与していることがわかります。



愛知用水の水利用の変化

出典：https://www.water.go.jp/chubu/aitiyosui/b(jyouhou-main)/01(aitiyosui)/02(hataraki)/b-01-02.html

第2章 | 木曾川・愛知用水流域「上・下流」の多様な自然環境

王滝村（最上流）の自然環境

御嶽山: 標高 3,067m の御嶽山のふもとにある王滝村は、中心地の標高が 930m 前後の村落です。土地の 97% は山林原野で、多雨地帯でもあり、山と緑から流れ出る水は、牧尾ダム・三浦ダム・滝越ダムに貯められ、愛知用水の水源や水力発電源としても使用されています。

野鳥: 耕作に向かない斜面の多い王滝村では、ツグミなどの渡り鳥の季節における捕鳥や、桑を栽培し養蚕などが盛んにおこなわれました。御嶽山には、「神の鳥」と呼ばれ、絶滅危惧種でもあるライチョウ（キジ科）が生息しています。しかし、キツネやカラス等の捕食者の分布拡大、シカやサル等の高山植物の採食による環境劣化、気候変動などの要因により、1980年代には約 3,000 羽と推定されていたライチョウの数は、2000年代にはその三分の一が減少したとされています。

高山植物・薬草: 御嶽山には、さまざまな薬草があり、「百草」が有名です。これは、修験者が「御嶽山の霊草百種を採り集めて薬を製すれば霊験神の如し」として秘伝の製法で作られた胃腸薬。御嶽山で採れるキハダなどが原料として使われています。



ライチョウ

(画像: <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/17142.html>)

牧尾ダムと吊り橋跡
(撮影: 古澤礼太)

出典: 王滝村役場ウェブサイト <https://www.vill.otaki.nagano.jp/> : 村誌王滝歴史編 II
: 環境省 <https://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/raicho.html>

豊浜（最下流）の自然環境

里山: 知多半島は尾張丘陵から続く緩やかな丘陵地帯です。特に知多半島の南側を形成している師崎層群は、北側よりも古く硬い地層です。そのため、山は雨風や海などの影響で削られずに残りました。知多半島全体において、大きな河川はありません。水はすぐに海へと流れてしまい、愛知用水の通水以前は水不足に苦しんでいました。水不足解消のひとつとして発達したのが、ため池です。現在でも、約 1300ヶ所のため池があるといわれています。水生の動植物の住処となる池や湿地が全国各地で減っていつている中で、多くのため池のある環境は、貴重な存在と言えます。このような里山の環境は、生物と人との共存の場です。「ごんきつね」の物語りで有名な知多半島は、丘陵とため池により、里山の生物多様性が残る地域です。

漁業: 西に伊勢湾、東に三河湾に面した知多半島は、名古屋都市圏のリゾート地としても有名ですが、「水が汚い海水浴場ランキング (2022年)」において、りんくう海浜緑地と新舞子の海水浴場がワースト 1位と 2位を占めています。しかし、知多半島の砂浜は、ウミガメの産卵も確認されています。また、知多半島南部の岩礁帯は、多くの海藻や魚の生息域となっています。恵まれた海では漁業が盛んであり、知多地区の漁獲量は、カタクチイワシやシラスが愛知県全体の漁獲量の約 75 ~ 85% を、タイは約 60% を占めています。とりわけ、豊浜は古くから漁業が盛んな地域で、万葉集で歌われた「須佐の入り江」とは、豊浜の須佐ともいわれています。



クロダイ

(画像: https://item.rakuten.co.jp/syunsen-maruto/10000055/?scid=af_pc_etc&sc2id=af_106_1_10000236)

中洲神社鳥居と鯛神輿
(撮影: 古澤礼太)

出典: 機関誌『水の文化』36号 愛知用水50年
: 愛知県 <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/koen/keikaku-2106.html>
: 豊浜魚ひろば <http://sakanahiroba.net/toyohama>
: ダイヤモンド編集部 <https://diamond.jp/articles/-/307066?page=4>

第3章 | 流域圏の上・中・下流交流

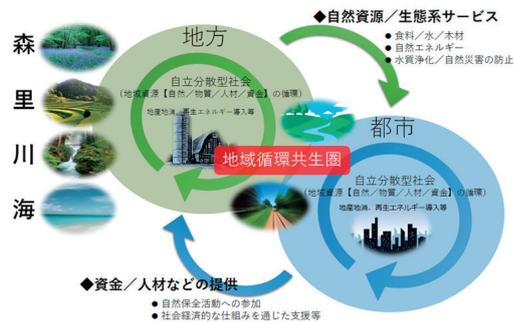
伊勢・三河湾流域圏でめざす地域循環共生圏

東海・中部地域では、河川の流域を単位とした持続可能な社会づくりへの取組が進んでいます。近年では、環境省が「地域循環共生圏」の考え方を提示して、「森・里・川・海」の自然の一体感を意識した地域づくりの重要性を訴えています。

「森は海の恋人」とは、宮城県気仙沼の牡蠣漁業家である畠山重篤さんの言葉です。海産物は森からの養分を受けて豊かに育つため、漁師たちが森の植樹活動を植林活動等をはじめたことで話題になりました。

中部ESD拠点では、伊勢・三河湾に注ぎ込む河川流域一帯を、私たちの地域として捉え、持続可能な社会づくりに向けた活動を展開しています。流域内の「南北問題」とも呼ばれる都市と農村の経済格差や社会的分断を乗り越えて、上流・中流・下流の人々が地域課題解決のために協働することが求められています。2010年に名古屋市で開催された生物多様性条約締結国会議(COP10)開催時には、木曾川の恩恵を受ける名古屋市民が源流の自然保護にどのように貢献できるかというテーマで、王滝村でシンポジウムが開催されました。

愛知用水で繋がる木曾川源流と知多半島の人々が、文化を通じて交流し、異なる自然環境の価値を理解することにより、経済的な相互補完や流域一帯の環境保全に向けた協働の可能性が広がるのではないのでしょうか。



地域循環共生圏とは ～地域が自立し、支え合う関係づくり～

地域循環共生圏とは

(画像: <https://www.env.go.jp/nature/morisatokawaumi/kyouseiken.html>)



伊勢・三河湾流域圏
(出典: 中部ESD拠点協議会)

考えてみよう!

- Q 1. ワークショップでは、愛知用水で繋がった源流の王滝村と最下流の知多半島の自然について学びました。それぞれ、魅力的だと感じた自然はどのようなものでしたか?
A. _____
- Q 2. 愛知用水によって知多半島の農業と工業は発展しましたが、山や海の自然環境にどのような影響があったと思いますか? 流域一帯の環境保全のために何ができますか?
A. _____
- Q 3. ワークショップでは、知多半島・豊浜鯛まつりから森里川海にまつわるさまざまな要素を学びました。SDGs(持続可能な開発目標)の17ゴールとのつながりをいくつ見つけることができましたか?

キーワード:

知多半島、愛知用水、伊勢湾、豊浜漁港、鯛、御嶽山、木曾川源流、薬草、野鳥、ライチョウ、上中下流交流、森は海の恋人、薬草・百草、

- A. 番:内容 _____ 番:内容 _____
番:内容 _____ 番:内容 _____



第4章 | ワークショップ開催報告 (2022年9月11日(日)9時30分～15時00分)

第1部：サステナブル社会を実現する流域圏の上下流交流

ワークショップ「知多半島・豊浜鯛まつりから考える森里川海」（主催：中部 ESD 拠点）は、愛知用水木曾川源流に位置する王滝村の地域おこし協力隊の企画「流域で繋がったらめでタイね」プロジェクトと協働開催しました。「流域で繋がったらめでタイね」は、豊浜鯛祭りで使用される鯛の張りぼてを上中下交流企画のシンボルとして独自で作成し、王滝村までの遡上（運搬）させるもの。通過地域でイベントもおこないます。活動の1日を本ワークショップとの共催とし、本プロジェクトおよび王滝村からの参加者が、南知多町の住民と交流するワークショップとなりました。

第1部では、中部大学国際 ESD・SDGs センター准教授の古澤礼太氏の「サステナブル社会を実現する流域圏の上下流交流」についての講演と参加者の自己紹介をおこないました。経済・社会・環境等の課題は地域ごとで考えるのではなく、河川の上下流で繋がる流域圏で課題解決へ取り組む重要性について講演がありました。



第2部：鯛神輿の制作

鯛祭りで使用される「鯛の張りぼて」の高さは約5m程ですが、今回の企画で制作される張りぼては、高さが約2mです。王滝村の地域おこし協力隊で、企画者の近藤太郎氏らにより、事前に張りぼての骨組みは完成していました。参加者は、鯛本体と骨組みを紐で結び固定していきましました。昼食後には、張りぼてに布を被せ、糸と針で骨組みと布を縫い付けて、本日の制作は終了です。

後日、目や歯の取り付けや南知多町の小学校での手形による鱗のペイント等の作業がなされました。鯛の張りぼては、愛知用水沿いの各地域においてイベントをおこない、王滝村へと運ばれました。



第3部：味わって考える木曾川・愛知用水上下流のサステナビリティ

鯛の張りぼての制作の合間には、南知多町の新鮮な海鮮を使用した昼食を通して伊勢湾の恵みを感じました。食材は、豊浜魚ひろばにおいて仕入れられました。また、豊浜漁港や会場となった豊浜モータースの方からのお差し入れもあり、とても賑やかな昼食となりました。

張りぼての制作後には、交流会をおこないました。王滝村や南知多町の食材を味わいながら、愛知用水の上中下流域の住民との交流という貴重な機会をもちました。最後に、王滝村からのマイクロバスを愛知県メンバーが手を振り見送って、ワークショップを終えました。

